

編 集 後 記

本号は食道の特集である。

食道ということになると、赤倉教授も座談会の中で言われているように、食道癌が中心とならざるを得ないであろう。胃癌の治療方法がある程度行き詰った時に、早期胃癌の診断法の著しい進歩に支えられて、胃癌の治癒率が向上しはじめたのと全く同じように、食道癌の治癒率の向上のためには、早期食道癌の診断が強く要請され始めている。そして既に10例前後の経験例が報告されているということは、この方面に於ける黎明を告げる喜ばしい事実といえるのではなかろうか。こういう観点から、本号に於ては、食道の診断と治療を中心にした各々の権威者による綜説と座談会を味わっていただきたいと思うのである。

高田氏による胃集検の展望は問題点を解説して余すところがないし、ここでも食道撮影のことが問題として提供されている。青山氏のいつものきめの細い独特な解説も、毎号楽しみになってくる貴重な症例欄も本誌の読者を引きつけることであろう。各地で行なわれている研究会の記事も、執筆される先生方のていねいな書きっぷりやら、にじみ出るばかりの情熱によって、楽しい読物の一つとして固定されてきた感じがする。

とにかく、この雑誌さえ目を通していれば、胃と腸に関する研究、臨床にひどく遅れてしまうということがない、という本誌の一つの目標を達成するために、建設的御意見をどうぞお寄せ下さい。今迄に寄せられたものは、毎月の編集会議で真剣に論議の対象となり、可能なものから実行されつつあることを特につけ加えておきます。

<市川平三郎>

<編集> 早期胃癌研究会